

# ハイジはどんな少女か・続々

——『楓物語』を中心に——

中 村 一 夫

二〇二二年度日本語学ゼミ生

## 一 問題の所在

二〇一七年に放映された「カップヌードル」(日清食品)のCM「HUNGRY DAYS アオハルかよ。」シリーズは、日本の著名なアニメ作品をモチーフとし、現代の日本に舞台を移して再構築したものであった。すなわち「魔女の宅急便」のキキ、「サザエさん」のサザエ、そして「アルプスの少女ハイジ」のハイジらを今時の高校生として描き出したのである。もともとそのどれもが「国民的」とも言えるほどの人気作品である。懐古的な気配を漂わせつつ、オリジナルでヒロインの相手役となっていたトンボやマスオ、ペーターらとの甘酸っぱい恋愛模様が描かれており、その爽やかさもあいまっておおかた好意的に受け取られたと思われる。

さて、そのうちの「アルプスの少女ハイジ」編であるが、ここではハイジが一六歳で、クララと同級生になっている(原作では四歳年長)。華やかな外見で下級生からの人気が高く、さらに雑誌モデルとしても活躍するクララに、ハイジ

は強い憧れを持っているが、その一方で自身の内なる劣等感に苛まれている。

「ハイジもおしゃれしたら？　せっかくかわいいんだから。」「クララ……。」

ハイジ一六歳。

「どうして私はクララじゃないんだろう。」

青春ってちよつといじわる。

「ねえ、ベーター、今日もクララがかわいくてさ、私なんか……。」「オレは今のハイジが好きだ。」「えっ!!」

このCMではベーターもハイジやクララの同級生として登場する。自らの容姿や性格に自信が持てないハイジは、ついベーターに向かって自虐的で弱気な台詞を吐いている。しかしながら、ハイジはハイジであり、クララはクララである。作中人物がそれぞれの属性をまとうことで、初めて物語は成立する。少女全員がクララになつてしまえば、その世界は多様性を失ったディストピア以外の何物でもないだろう。私たちは、買物にでかけるのに財布を忘れる女性や、箒にまたがり空を飛ぶものの集中力を欠いて落ちそうになる魔女、そして超ポジティブな性格で周囲の者を明るい気持ちにさせる山の少女らの紡ぎ出す物語に心を躍らせるのである。件のCMシリーズはキャラクターとは何か、その魅力は奈辺にあるのかを考えさせるものとして、たいへん興味深いものであった。そしてそれらを解き明かすことは、日本の文化の一端を知る助けとなると思われる。

さて、中村(二〇一九)<sup>1</sup>、中村(二〇二〇)<sup>2</sup>では「アルプスの少女ハイジ」の新旧の翻訳書を対象とする調査と考察を重ねてきた。そこでは主にキャラクターや属性に関する表現に焦点を当てた。本稿はそれらに続くものである。まずは「アルプスの少女ハイジ」という作品について、簡単にまとめておく。一九七四年にフジテレビ系列で放映されたアニメ「アルプスの少女ハイジ」<sup>3</sup>は、一九世紀後半に出版されたヨハンナ・シュビリの児童文学を原作とする

(一八八〇年に第一部、一八八一年に第二部が刊行)。チューリッヒやヒルツェルでの生活を通して、シュピリはスイスとドイツを舞台とするこの物語を書き上げた。日本においても、原作の刊行からさほど間をおかずにこの作品の翻訳が出版され、その後現在に至るまで夥しい数の翻訳がもてられた。最も早い時期に刊行されたものは、野上弥生子が訳出した『ハイヂ』(家庭読物刊行会)である。一九二〇(大正九)年に世界少年文学名作集の中の一冊として公にされたもので、英語からの重訳ではあるが、後に陸続と現れる翻訳や関連メディアに多大な影響を与えた。野上は一九三三(昭和八)年二月から翌年一月まで新しい抄訳「長編童話 アルプスの山の娘 ―マダム・スピリによる―」を「婦人之友」に掲載し、その連載で省略した箇所を補った上で、一九三四(昭和九)年六月に「アルプスの山の娘(ハイヂ)」(岩波文庫)を出版した。この書がアニメ版の典拠となったことはよく知られるところであろう。

その野上の最初の翻訳から五年後の一九二五(大正一四)年に、数多のハイジ関連書の中にあつて、やや風変わりな翻訳書が現れる。中村(二〇二〇)および本稿で主たる調査対象とした山本憲美訳出の『楓物語』(福音書館)がそれである。この書では、明治・大正期の翻訳によく見られた手法、すなわち作中人物名を日本の名前に置き換える形で描かれている。書名にある楓は主人公ハイジの名前であり、以下、弁太(ベーター)、久良子(クララ)、古井(ロツテンマイアー)、本間(ゼーゼマン)「クララの父」、倉瀬(クラッセン)「クララの主治医」、柴田(ゼバスチャン)「本間家使用人」、伊達(デーテ)「ハイジの叔母」などとなっている。それぞれがオリジナルの作中人物名に寄せて名付けられているものの、舞台がスイスやドイツのままであるため、いささか違和感を覚えるのは否めないが、これが当時の翻訳の方法論として通行していたこともまた事実である。

では、この物語に登場する楓(ハイジ)や久良子(クララ)らは、いったいどういう人物として描き出されているのだろうか。その様相は、他のハイジ本とは異なるものであるのか。また違いがあるとすれば、どのような差異が認

められるのだろうか。言うまでもなく、作品は翻訳者の原作の捉え方を反映した表現によって組み上げられる。なかでも作中に登場する人物をどのように描いているかというところは、訳出する者の解釈やイメージを強くうかがわせる部分である。一例を示す。

「これは何だと思ふね。」「わたしの腰かけだわ。ね、さうでせう。だつて、こんなに高いんだもの。すぐと出来つちまうのねえ。」「あの児は慇巧だ。なかなか眼が鋭い。」（野上・二三）

「楓や！ 何んだろ、是れは？」「あたいの腰掛けだ！ 直ぐ出来るね」「よく解つたな。中々見当を付けるのが旨いぜ」（山本・三五）

「これ、なんだか、わかるかね、ハイジ？」「わたしのいす。だつて、とっても背が高いもの。あつというまにできちやつたのね。」「よくわかる子だ。いい目をもっておるな。」（上田・四五）

ハイジ（楓）が叔母のデーテ（伊達）に連れられてアルムにやってきた翌日のこと、彼女のためにアルムの爺さんが専用の椅子を作るくだりである。初対面の祖父にも臆することのないハイジの無邪気さの伝わる会話のやり取りであるが、それぞれで描出される彼女の人物像は同じものに見えるだろうか。たとえばハイジの自称詞が野上版と上田版は「わたし」となっているところ、山本版では「あたい」となっている。また文末の表現も野上版と上田版では「もの」「のね」などの女性性を強く感じさせる物言いとなっているが、山本版では「うだ」「用言＋ね」というやや男性寄りの中性的な口調が認められる。これらの表現から、享受者は別の人格、性質、属性を持った少女像を感じることになる。翻訳の違いによる人物像の差は、アルムの爺さんの物言いからも看取できるであろう。「うや」「うな」「ぜ」などのやや粗暴とも思われる文末表現を持つ山本版に対して、野上版や上田版は温和な好々爺という印象を受ける。山本憲美の翻訳は野上版と同じく英語版からの重訳であるが、その表現の特異性は際立っているといえよう。

一九九〇年代後半以降、この種の潜在的イメージに根ざす表現を役割語と呼び、印刷媒体のみならず、さまざまなメディアに関わる言語現象として、広く注目されるようになった。この方面の研究の先駆的存在である金水敏は役割語を次のように定義している。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができる、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかににも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

役割語は必ずしも現実世界で行われる日常的な言語活動を写し取るものではない。特定の表現が特定の人物像やキャラクター、属性などと結びつくという知識を経験的に共有しているという点に着目しているのである。その種類の典型化された経験知のことをステレオタイプというが、役割語はそれと強く関係するものである。それらは類型化、典型化によって物事の本質を暴くことがある一方で、時には先入観や固定観念、偏見などとも容易に結びついてしまう危険性もある。本稿のもととなった四年次生対象の演習では、こうしたステレオタイプと結びつく特定の表現に目を向け、高い知名度を誇る作品の表現の様相について、考察を加えようとした。

## 二 調査の対象と方法

本学文学科日本文学・文化コースの日本語学ゼミ（中村担当）では、二〇一八年度開講の「日本文学・文化演習Ⅱ」（四年次生対象）において、翻訳された海外小説（Johanna Spyri『HEIDI』一八八〇年～一八八一年）に現れる役割

語や属性表現に関する共同研究を行った。主たる調査対象は一九三〇年代と二〇〇〇年代に刊行された二つの翻訳である。一つは嚆矢とも言える野上弥生子の作品、もう一つは二〇〇〇年以降に刊行された新しい上田真而子の作品である。この調査では、ステレオタイプと結びつく特定の表現（役割語や属性表現）および外来語や表記などに注目し、時代を異にする翻訳者の手になる同作品の表現を比較することで、大正時代の翻訳のありようや日本語が内包する文法的な分類法（発想や享受、影響）について、考察を加えた。<sup>1)</sup>次に二〇一九年度に開講した同じ講座では、大正時代に翻訳された山本憲美の『楓物語』（一九二五年）を調査の対象とした。前年度に調査した野上弥生子と上田真而子の作品を比較対象とし、独自の視点、文体を持つ山本憲美の翻訳の特質（主に人称代名詞と特異な表記について）を考えた。先に扱った二つの作品と対比させることで、三人の翻訳者の作品の捉え方とともに時を隔てたところにある近現代の日本語の諸相、さらには各翻訳の時代的な特性をも掘り取ろうとした。<sup>2)</sup>今年度は同じ山本憲美の『楓物語』を再度取り上げ、二〇一九年度に捉えきれなかった点を考えようとする。以下の記述は受講生による報告、質疑応答、議論の中で見いだされたものであり、また受講生がレポートとして提出したところからまとめたものである。本稿ではその成果の一部を報告する。

今回の調査に使用したテキストは以下のものである。

山本憲美訳『楓物語』（福音書館、一九二五年、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1017014>）

右の原著作は入手、閲覧が困難なため、国立国会図書館デジタルコレクションに収められているものを使用した。本文を引用する際には異体字、旧字を通行の字体に改めている。また比較のために使用した翻訳（二〇一八年度の調査対象）は次の二編である。

野上弥生子訳『アルプスの山の娘（ハイヂ）』（岩波文庫、一九三四年初版、調査では一九三八年九刷を使用）

上田真而子訳『ハイジ 上・下』（岩波少年文庫、二〇〇三年）

本年度の調査に参加した「日本文学・文化演習Ⅱ」の受講生は、日本語学ゼミに所属する学部四年次生八名である。以下に彼らの氏名を記す。なお学生の指摘を記す場合は、彼らの姓のみを明示する。

赤野梨緒・浅倉昌哉・石川登志記・伊藤未歩・遠藤由彩・佐藤竜志・千葉智哉・山口美里（五十音順）

続いて調査の手順を示す。春期では役割語に関わる表現、秋期では特徴的な表記、表現を主たる考察対象とした。

- 1 山本版をそれぞれの受講者で分担する。
- 2 各自の担当する箇所から、属性に関わる表現を抜き出していく。特に会話文の中に現れる人称詞（前回調査の確認のため）と文末の表現に着目し、役割語として機能していると思われるものを抽出していく。その際、発話者がどのような人物（性別・年齢・性格・職業など）であるかを正確に把握しておく。また会話以外の地の文に、特定の人物像をうかがわせる表現があれば、それも抜き出しておく。文末の表現については認定の難しいものもあるため、いわゆる自立語一語を含む一文節を取り出すようにした。
- 3 2で抽出したものを、人称詞・文末表現・その他と項目ごとに分けてエクセルに入力し、コーパスとして使用できる形に整える。

- 4 これらの結果をまとめ、登場する人物ごとに属性、性質と表現の相関関係を見出し、考察を加えていく。
- 5 山本版では、使用する語種や漢字表記に付されるルビ、オノマトペなどに特徴的なものが確認できるため、右の調査と並行してそれらについても抽出、整理した後に、特徴を明らかにすべく考察の対象とする。

受講生には春期、秋期でそれぞれ二回ずつ、合計四回の報告を課し、それに基づいて『楓物語』のことばと表現（翻訳・役割語・属性表現など）に関して議論を深めていった。

### 三 文末表現から見るキャラクター

役割語から何を読み取るか、どう読み解くかということであるが、ともすれば「女らしい」「男っぽい」「田舎者」などといった単なる表層をなぞった作中人物論の域を出ない印象批評に留まる恐れがある。そこで例年と同じく調査、考察を行う上で、「日本語史上の事実を踏まえること」「個別的な人物論ではなく、属性を型として一般化抽象化すること」という二点に留意した。いかなる経緯で役割語として認識されるようになったかの語誌を抑えることは肝要であり、また文学論ではないので、作中人物そのものの個別的評価を行うのではない。調査対象の人物がどのような属性・キャラクターをまとうているのか、いわゆるアーキタイプ（元型・祖型）を睨みながら考究することが求められる。定延（二〇一一）のいう、役割語に対応するキャラクターという考え方も重要な観点である。<sup>(6)</sup>

中村（二〇一九）においては、野上版と上田版に現れる人称詞と文末表現、さらに属性やキャラクターをよくうかがわせる表現に着目した。また中村（二〇二〇）では、山本版の人称詞、外来語、特異な表記について考察を加えた。今年度は積み残しとなった山本版の文末表現に関することと、特徴的な表現について報告することとする。本章では主に女性に関わる文末表現について述べる。

さて、役割語としてよく機能するものが人称詞と文末に現れる表現であるのは周知のことであろう。『日本語学大事典』（二〇一八）の「役割語」（金水敏担当）の項目には、「日本語の場合、一人称代名詞、および存在動詞・断定辞・アスペクト形式・終助詞等の述語形式が有力な役割語の指標となる。それ以外にも、感動詞・間投詞、命令表現等が重要である。」と記述されており、「私が行きます」「僕が行くよ」「わたくしが行きますわ」「俺が行くぜ」などの例

からも明らかのように、伝達される内容は同一でも、それを語る人物像は人称代名詞と述語形式によって明確に異なるものが想起されるだろう。

これまでの二回の調査によって、野上版と上田版のハイジの台詞の文末表現にはほぼ共通する用法が確認できた。すなわち「かしら」「なの」「ね」「わ」「のよ」「だわ」「もの（もん）」など、いずれも主に女性の発言を想起させるものであるが、個別の箇所での異同、相違はあるものの、全編の傾向を俯瞰した場合、約七〇〇八〇年の時を隔てた二つの翻訳の間に大きな違いは見られない。二〇〇〇年以降に刊行された上田版は全体的に現代の口語に近く、ただ物言いになってはいるが、主な文末の表現形式については変わらないのである。こうした両翻訳に共通する点は、個別の人物像を際立たせるといよりは、女性であることをまずは意識させる定型的な表現であったと考えられる。ところが、山本版では明らかに異なったものが使用されている。たとえば次のもの。

弁ちゃん、弁ちゃん！ 火事！ 火事！ 山が皆な燃えてるよ！ 雪の処も燃えてらあ！ あー空も！ 見て御覧！ 大きな岩が燃えてら！ 綺麗だな雪の燃えるのは！ 弁ちゃん 御起きよ！ あの鳶の巣の方まで燃えてか彼の岩も、やあ樅の木も燃えてら。皆な燃えてるよ！（山本・五九 原文ママ）

楓が山羊を追う弁太とともに山の上まで来たその日の夕刻、山の端に落ちてゆく夕陽が空を赤く染めるさまを見て叫ぶところである。繰り返される「！」に少女の大きな驚きを看取できるが、それ以上に「ら」「らあ」という荒っぱさを感じさせる口調に山本版の特異性がある。これらは「動詞・助動詞の終止形の語尾「る」に終助詞「は」が付いて変化したもの。」「らあ」とも。」「（『日本国語大辞典』第二版）、（『動詞終止形の活用語尾「る」＋終助詞「わ」の変化】「…るよ」のぞんざいな言い方。〔短呼して「ら」とも言う〕」（『新明解国語辞典』第八版）などと説かれるように、極めてくだけた物言いであり、山本版における楓という少女のありようを強く印象づける。この表現は「弁ち

やんなんて、其処へ行つて先生に訊かれてさ、何んにも説明無ければ皆に笑はれちまわ。お常さんにだつて笑はれら、随分見つともないなあ」(山本・三三四)と物語の終盤になつても使用されており、楓の人物像を象るものになつてゐる。一方で野上版と上田版では次のように記述される。

ペーテル、ペーテル、火事になつたのぢやない。みんな燃えてるわ。岩がまつ赤よ。雪の原に火がうつつてるわ。樅の樹も燃えて立つてるわ。山ぢう火事よ。(野上・三四)

ペーター！ ペーター！ もえてるー！ もえてるわ！ 山がみんなもえている！ 雪の原つばも、空ももえているー！ たいへんよ、見て！ ねえ、見て！ あの高い岩山がまつ赤よ！ ああ、きれいな、火になつた雪！ ペーター、見てよ、鷹のおうちのあるところも火事よ！ ほら、あの岩を見て！ あのもみの木を見て！ みんな、みんな火事よ！(上田・上七二)

この二つの翻訳では幼い少女の話し方としてはいささかませた印象があるものの、ほぼ共通した人物像が想起される(驚き方に違いはあるが)。終助詞の「わ」のほか、「体言＋よ(まつ赤よ、火事よ)」など、女性性を感じさせるものである。同じ「よ」でも、山本版では「用言＋よ(燃えてるよ)」という形で中性的なものになつていた。

では『楓物語』の主人公である楓がどのような文末表現を取っているか、受講生の抽出した主なものは、文法あるいは語彙の面からは厳密な解析、分類にはなっていないが、文末のバリエーションとしてここに列挙する。

か・かい・かしら・かね・から・からさ・からね・くれ・くれよ・さ・さあ・さうや・だ・だあ・だい・だね・だもの・だよ・だろ・だわ・ちやつた・つて・てばよ・てよ・でせう・なあ・なの・にね・ね・の・のよ・ます・もの・や・よ・ら・らあ・わ・んだ

この一覧からも、楓のキャラクターが少女(女性)を意識させることに加えて、まだ性において未分化の状態であ

ることを強く感じさせている。前稿では楓の人称詞の使用においても同様の傾向があったことを指摘した。楓は自らのことをしばしば「あたい」と呼称するが、金水敏編『役割語小辞典』（二〇一四）の「あたい」の項には「もともと東京下町、または花柳界の芸者や芸者見習いの少女が用いる自称詞の一つであり、主に同等の相手と話す際に用いられた。文献には明治中期頃から見られる」「主として女性が用いる一人称代名詞（女ことば）。男勝りな性格の女性や教養・知性・品位の低い女性の話し手を想起させる」とあり、「わたし」はもとより「あたし」よりもさらに俗語的な表現として理解されるものであった。金水の説明に従うならば、楓の人称詞や文末表現はまさに明治・大正期の若く活発で自然体の「少女」の典型的な姿を想起させる役割語となっていると解釈される。なお浅倉によって、フランクフルトの本間邸に滞在している折には、楓も待遇表現を使用していることが報告された。

ではもう一人の少女である久良子はどうか。こちらにも主なものを示す。

おくれ・から・だろ・だわ・て・てよ・です・でせう・ね・の・のよ・ます・もの・よ・わ・わね

久良子の登場する場面は限定的であるため、楓ほどの多彩な表現は見られない。しかしながら、「おくれ」や「です」「ます」「体言＋よ」など、女性的あるいは対人関係や社会的属性をわきまえた待遇表現をよく使用するなどの特徴が見られる。「て」「よ」などの終助詞は女性性を強く想起させる物言いであった。『日本国語大辞典』の「て」の項には、「連用形を受けて上昇のイントネーションを伴い、質問・反問等を表わす女性語。優しさと親しみが感じられる」「連用形を受けて『てよ』の形で、自分の意見や判断を伝える女性語。↓つてよ」とあり、ここから送られた「つてよ」の項では、「形容詞の連用形に付いて、話し手自身のことについてである、ということ、あまり断定的でなく聞き手に強く言ういい方。東京などで若い女性が用いた。イントネーションは『よ』が高い」とあって、いずれもある程度成熟した女性をイメージさせる語として説明が付されている。特に「つてよ」は明治時代の女学生が使った

いわゆる「てよだわ言葉」として知られるもので、その当時、女性のことばとして広まったものであった。同じ少女という範疇に括られる楓と久良子であるが、やはり描き出されるキャラクターは別の属性を持っているといえよう。

でも、あなただつて御稽古をしなけりやいけないわ。誰れだつてするものよ。神田先生は夫りやお優しいのよ。怒つたことなんてないの、聞けば何んでも教へて下さるは。だけでもね、先生の言ふ事が解らなくつても訊いちや駄目よ。もうさうすると種々な事を話して尚解らなくなるわ。黙つて聞いて居ると後で解る事があるの。良くつて？（山本・一二三・久良子↓楓）

前稿で指摘したことであるが、この物語においては、「山」と「都会」という対立軸を意識すると、それと連動する形での表現の使い分けが浮かび上がってくる。すなわち「山」の人々が比較的くだけた話し方をするのに対し、「都会」に属する人々はわきまえのある穏やかな標準語を使うという図式である。右の久良子の発言はそれをよくうかがわせる。関連して、楓に「わたくし」「わたし」が使用されないのは、「都会」とは本質的に相容れない関係にあると考えられるのではないか。なお『楓物語』の久良子には「あたし」が使用されていることを言い添える。

「大きいので何んだい？」「可愛想だね、御前は」「泣くんぢあ無いよ、ね、あたいが毎日来てやるから淋しか無いだろ、何か欲しけりや上げるからね」（山本・五四）

親羊が売られてしまった子羊に楓が語りかけるくだりから抜き出したものである。山口は楓の文末表現を久良子のそれと比較して、「かい」「だい」といった男性を想起させるものは楓のみが使用しており、逆に女性を思わせるものは少ないことを指摘した。また千葉は楓が待遇表現を使うのは本間郎が主であり、山に帰ると中性的・男性的な表現をよく使用するようになるという。赤野もまた山に戻った楓が、親交のある人々に囲まれて生活するため、待遇表現を使用しないことを報告した。楓は「山」と「都会」を往還する存在として描かれるのであるが、こうした文末表現

の切り換えにより、時々属性の変更が生起しているのであった。さらに楓の叔母の伊達（デーテ）もまた、「山」と「都会」を行き来する者であるが、楓に対しては「知らないからだよ」（山本・一〇四）、「飛ぶ様だもの」（山本・一〇五）、村人には「遅れます」（山本・一〇六）、「寄れますからさ」（山本・一〇六）、古井に対しては「御免遊ばしませ」（山本・一一六）、「御座います」（山本・一一七）などと明確に異なる表現を使用している。伊藤はこれについて、立場や状況をわきまえることのできる大人の姿（類型）を見いだしているが、楓の場合と同様に空間移動に伴う変化を見て取ることも可能だと思われる。

ここまで『楓物語』の女性に関する表現について考察を加えたが、男性のものも確認しておく。前稿までで、野上・上田の両翻訳において、男性たちの会話には「か」「かい」「さ」「ぞ」「だ」「だね」「だよ」「よ」などの助詞、助動詞あるいはそれらの組み合わせの類が使用されており、おおむねどの表現も男性性に傾くことを指摘した。この傾向は山本版でも大きく変わることはない。まずアルムの爺さんのものを示す。

い・か・かあ・かい・さ・ぜ・たろ・だ・だい・だぜ・だな・だよ・だろ・です・でせう・な・なあ・ね・まい・ます・よ・ら

次に弁太のもの。

い・か・さ・すら・ぜ・だ・だあ・だい・だよ・だろ・なあ・なよ・もの・や・やらあ・よ・らあ・んだ  
さらに本間（クララの父ゼーゼマン）のものを記す。

おくれ・かしら・かね・だ・だね・だろ・だろ・です・でね・ね・ねえ・まい・ます・や・んだ

見られるように、楓や久良子らの女性には現れないものが使用されている。「さ」「ぜ」「な」「まい」などがそれである。リストにあげたもの以外では、動詞の命令形も男性の発話に現れていた。またアルムの男たちとフランクフルトの人

でも違いを見せている。すなわちアルムの爺さんと弁太には重なるところがあり、一方本間のものは少し違いを見せている。『役割語小辞典』の「さ」の項目には、「終助詞『さ』は〈男ことば〉として、自分の考え・主張を持った大人の男性が用いる。対等、もしくは目下の人物に自分の意志や信念を伝えるときに使われ、発話者の精神的な強さや包容力、格好よさ、自立した男性像、異性に媚びない男性像を想起させる。」とあり、古くは近世から見られるものである。また「ぜ」については、「もともとは江戸時代に成立した男女両用の言葉であったが、その頃からすでに男性語化がうかがえる。同様の意味を持つ終助詞『ぞ』『よ』に比べ、俗っぽく、粋な、あるいは柄の悪い印象がある。」とされている。いずれも男ことばの範疇に含まれる典型的な語、形式であるが、すべての男性に広く使用されるわけではなく、ここでもキャラクターと連動する「山」と「都会」の二項対立を確認することができるだろう。佐藤は、アルムの爺さんの発話について、相手が「山」の人間か「都会」の人間かで、待遇表現の有無などの使い分けがなされていることを報告する。また石川は、弁太の発話には名詞のみ、動詞のみといった一語文が多いことを報告し、彼の粗暴さや教育の程度が原因であると指摘した。

#### 四 まとめにかえて

前節までで扱った事項以外にも触れておく。アニメ版「アルプスの少女ハイジ」では、「山」を象徴する赤色と「都会」を象徴する青色が対比的に使用されている。作中人物の服装（ハイジの赤系、クララの青系）や邸の設え（深い青で彩られるゼーゼマン邸）など、確かにそのような描き分けがなされている。山本版に見られる色彩語に関して、遠藤は緑・真赤・赤い・真黄色・白・茶・赤・黄金・濃藍・青・黄・金色などが使用されていることを報告し、中でも山

羊の毛が赤とされていることに着目した。色彩に関する指摘は山口も行っており、ドイツ語による原文では山羊の毛色は茶となっていることから、これは古代日本語の色彩語が赤・青・白・黒の四色の識別を行うところから来ているもので、山本の色彩の認識により茶を赤と翻訳していると指摘する。同様の報告は赤野も行っていた。首肯すべき見解であろう。浅倉は、三点リーダーの長さが作中人物の心中を描き分けているのではないかという。最も一般的な二回繰り返しが、最大で六回も連なるものがある。

それがと云ひますと、山中の生活を久しくやりましたために………（山本・一七九）

つまり今日までの教育が不十分の爲め当地に参らるる迄の間に………（山本・一八〇）

いずれも神田（久良子や楓の教育係）の発話である。本間から楓の人となりを質問され、しどろもどろになって言葉に詰まるくだりである。山本の翻訳では強い驚きに対して「！」を過剰に使用する傾向もあり、この種の記号の使用方もまた特異な点として認めることができるだろう。この他、現代日本語ではあまり見ることのない表記（特に当て字）に関する報告が多かったが、これについては前稿でも触れたところであるため、ここでは省略に従う。

三年間に渡って調査対象としてきた新旧の「アルプスの少女ハイジ」において、物語内のアーキタイプという観点から役割語や属性表現と人物像の形成の連関が確認された。時に戲画的に過ぎる使用も見られるものの、それぞれの翻訳内部の論理（あるいは世界観、翻訳者の解釈）にしたがって役割語として機能する表現が使い分けられており、必ずしも同一人物が同じようなキャラクターを想起させるものとなっているわけではないことも明らかにになった。とりわけ山本慈美の『楓物語』はある面で当時の翻訳の方法論（和名の名付けなど）をよく踏襲しており、表現、表記に明らかにすべき点が数多くあると思われる。さらに調査を進め、大正時代の日本語、大正時代の翻訳作品として、正しく位置付ける必要がある。演習での報告や議論、さらには提出されたレポートで指摘されたもののすべてをここ

に著すことはできなかったが、これまでの共同研究の一端は示しえたと思われる。

「楓ちゃん、私、何時までも此処に居たいわ」とあちこちを向き乍ら久良子が言つた。「だからあたしが云つたのよ。此処みたいに良い処は世界中にないつて」と楓も喜んで言つた。(山本・三五九)

年度ごとに受講生は入れ替わるものの、どの世代も熱心に共同研究に取り組んでくれたことに感謝の意を表する。久良子と楓のやり取りのごとく、「何時までも此処に居たい」「此処みたいに良い処は世界中にない」という思いをもつて稿を閉じることとする。本報告は受講生の取り組みと指摘をまとめたものであるが、文責はすべて稿者にある。

#### (注)

(1) 中村一夫・二〇一八年度日本語ゼミ生「ハイジはどのような少女か―新旧の翻訳と役割語―」(『国文学論輯』第四〇号、二〇一九年三月)

(2) 中村一夫・二〇一九年度日本語ゼミ生「ハイジはどのような少女か・続―『楓物語』のことばと表現―」(『国文学論輯』第四一号、二〇二〇年三月)

(3) 高畑勲(総合演出)・小田部羊一(キャラクターデザイン)・宮崎駿(画面構成)らの手になる。

(4) 本文を引用する場合は翻訳者の姓のあとにページ数を付している。なお上田版は上・下二分冊なので、その旨を書き加えた。

(5) 金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』(二〇〇三)

(6) 定延利之『日本語社会のぞきキャラくり』(二〇一一)

(7) 「らあ」は楓の他に弁太も使用する。

※参考1…『楓物語』登場人物（「アルプスの少女ハイジ」の標準的な呼称と併記する）

楓（ハイジ） 一歳の時に両親を亡くす。五歳でアルムへ。八歳でフランクフルトへ赴くが、病を得たため、再びアルムへ戻る。

おじいさん（アルムおんど） 楓の父方の祖父。今は訳あつて一人で山に住む。七十代。

弁太（ベーター） 羊飼いの少年。春から秋にかけて、村の山羊を山へ連れて行き、放牧させる。祖母、母と暮らす。

久良子（クララ） フランクフルトの名家本間家の子女。足を悪くして立つことができない。楓より四歳年長。

古井（ロッテンマイアー） 本間家の召使いの監督役。家事一切を取り仕切る。楓につらくあたる。使用人に柴田（ゼバスチャン）とお常（ティネット）がいる。

本間（ゼーゼマン） 久良子の父親。ビジネスマンで欧州中を忙しく駆け回っている。

隠居（大奥さま） 久良子の祖母（本間の母）。ホルシユタインに住む。楓のよき理解者。

倉瀬（クラッセン） 久良子の主治医。楓のよき理解者。のちに楓のおじいさんと交流を深める。

伊達（デーテ） 楓の叔母（母親の妹）。楓が両親を亡くした後、一人で彼女を育てた。フランクフルトに働きに出ることになり、楓を祖父のところへ連れて行く。初登場時二六歳。

※参考2…次頁の表は、金水敏「キャラクターとフィクション 宮崎駿監督のアニメ作品、村上春樹の小説をケーススタディとして」（定延利之編『キャラ』概念の広がりと深まりに向けて）二〇一八、所収）が提示した観点を踏襲してまとめたものである。注2の報告に掲載した。分類に見える「メンター」は良き指導者、優れた助言者を表し、「トリックスター」は物語に登場するいたずら者（秩序の破壊者兼創造者）、「影」は主人公の最大の敵を表す。本稿の理解のために再掲する。

名 前	アーキタイプ	訳者	自 称 詞	言 語
ハイジ (楓)	主人公	野上	あたし・あたしたち・わたし	女ことば (俗)・標準語
		山本	あたい・あたし・あたしたち	女ことば (俗)
		上田	わたし・わたしたち	標準語
おんじ	メンター	野上	わし・わたし	老人語
		山本	おれ・おじいさん・わたくし	男ことば・標準語
		上田	わし	老人語
ベーター (弁太)	トリックスター	野上	ぼく	男ことば (少年語)
		山本	ぼく	男ことば (少年語)
		上田	おれ	男ことば
クララ (久良子)	同調者	野上	わたし・わたしたち	標準語
		山本	あたし・わたし	女ことば (俗)・標準語
		上田	わたし・わたしたち・わたくし	標準語
ロッテンマイアー (古井)	敵対者・影	野上	わたし・わたくしども	標準語
		山本	わたし・わたくし・わたくしたち	標準語
		上田	わたくし・わたくしたち	標準語
クララ祖母	メンター	野上	わたし・わたくし	標準語
		山本	わたし・あたし・おばあさん	標準語・女ことば
		上田	わたし	標準語
ゼーゼマン (本間)	同調者	野上	わたし・ぼく・おれ	男ことば・標準語
		山本	わたし・ぼく・わし・おとうさま	男ことば・標準語
		上田	わたし・ぼく	男ことば・標準語
クラッセン (倉瀬)	メンター	野上	わたし・われわれ	標準語
		山本	ぼく・わし・わたし	男ことば・老人語・標準語
		上田	ぼく	男ことば
ゼバスチャン (柴田)	トリックスター	野上	わたし・ぼく・おれ・てまえ	男ことば
		山本	わたくし・ぼく・おれ	男ことば
		上田	わたし・ぼく・わたくし・おれさま	男ことば
デーテ (伊達)	敵対者	野上	わたし・わたくし	標準語
		山本	あたし・わたし・わたくし	標準語・女ことば (俗)
		上田	わたし・わたくし	標準語